

《埼玉県における森林・林業に関する施策等参考資料》

1 埼玉県5か年計画大綱(案)

【針路10】豊かな自然と共生する社会の実現

<背景>

- ・本県のみどりは県土の約6割を占めているが、都市化の進展等に伴い緑地率は減少しており、特に平地林面積は大きく減少。
- ・人口減少や高齢化の進行により里山や森林は管理が行き届かず、ニホンジカによる獣害等も重なり荒廃が発生。
- ・一方、近年では温室効果ガス排出と吸収の均衡（カーボンニュートラル）の実現など、豊かな自然と共生し、全ての県民が安心して豊かに暮らせる持続可能な社会が求められている。

<施策> みどりの保全と創出

(内容)

- ・都市と山村の連携による豊かな森づくりを進めるとともに、水源のかん養や生物多様性の保全など森林が持つ多様な機能を持続的に発揮させるため、適切な森林整備を進める。

(取組)

- ・都市と山村の連携による森づくり
- ・県民参加による森づくりの推進

【針路12】儲かる農林業の推進

<背景>

- ・木材価格の長期低迷等により、計画的な伐採や植栽が行われず、森林の若返りや循環利用が進んでいない。
- ・また、林業従事者の減少や高齢化が進んでいることも課題。
- ・所得が向上し儲かる農林業の実現に取り組むことが必要。

<施策> 林業の生産性向上と県産木材の利用拡大

(内容)

- ・「伐って・使って、植えて、育てる」森林資源の循環利用を進め、森の若返りを図ることで、持続可能な森林管理を推進。
- ・林業事業体の生産性を向上させるため、スマート林業や森林の団地化・施業の集約化等を推進する。
- ・県産木材の利用を拡大するため、安定的な供給体制を整備するとともに、公共施設などにおける利用を推進。

(取組)

- ・皆伐・再造林システムの確立・普及
- ・スマート林業技術の導入・普及
- ・公共施設や民間住宅などでの県産木材の利用拡大

2 本県のSDGsの重点テーマ

- 「埼玉の豊かな水と緑を守り育む」

【朝日新聞「SDGs ACTION」(特集：まちを変える、まちが変わる) 記事より抜粋】

- ・大野知事への「将来に向けてどのようなまちづくりを進めていくのか」についての取材
(2021.3.9)

Q SDGsの重点テーマとは？

〈大野知事〉

「一つは「埼玉の豊かな水と緑を守り育む」です。埼玉県は荒川や利根川などが流れ、県土に占める河川面積の割合が全国2位の3.9%になります。都心の近くにありながら森林面積も県土の約32%を占め、緑にも恵まれています。豊かな水と緑はまさに将来に残すべきものです。」

3 本県の森林について

(1) 森林の現況

- 本県の森林面積は119,779haで県土の約3割を占め、所有形態別に見ると国有林が10%、民有林が90%となっている。
- 民有林における人工林の割合は53%で、その約8割が木材として利用可能な林齢に達している。
- 本県の森林は、シラビソ林など貴重な原生林を残す奥秩父の山々から、山地・丘陵地にいたるスギ・ヒノキの林業地、コナラ・クヌギなど武蔵野の雑木林として親しまれてきた平地林まで、多彩な姿が見られる。

(2) 本県の森林・林業に関する歴史・文化

- 本県の南西部、飯能市・日高市・毛呂山町・越生町の2市2町にまたがる西川林業地では、「江戸の西の方から来る木材」との意味から「西川材」と呼ばれる、材の色、艶がよく、年輪が緻密で節の少ない良質材が生産されてきた。
- 明治から昭和にかけて活躍した本県出身の本多静六博士は、日本初の林学博士であり、水道水源林・鉄道防雪林などの創設や、日比谷公園や大宮公園など全国の多くの公園を設計し、近代日本の発展に大きく貢献した。さらに、博士が100年先を見据えて計画し作り上げた明治神宮の森は、今なお高い評価を得ている。
- 川越市・所沢市・狭山市・ふじみ野市・三芳町の5市町にまたがる三富地域では、江戸時代からクヌギやコナラなどの平地林の落ち葉をたい肥として利用する循環型農業が続いてきた。